

2014.5.3

生誕150年 **ドイツ・ロマン派最後の巨人**
リヒャルト・シュトラウス **第2回**

プログラム

生誕150年に当たるドイツ・ロマン派の巨匠、リヒャルト・シュトラウスを特集するシリーズの、今日は第2回目をお送りします。

リヒャルト・シュトラウスのピアノ曲というと非常に珍しく思われますが、4歳でピアノの教育を受け、6歳で作曲を始めたという神童だったことを考えれば、必然的なことかも知れません。唯一のピアノ・ソナタは16歳の頃の作品で、“ベートーヴェンの運命交響曲第1楽章へのオマージュ”とも言われますが、十分な力作に仕上がっています。交響詩「死と変容」は25歳の時の作品で、死と直面するの病人が激しく戦いながらも、やがてその時を迎え、死の恐怖から解き放されて天界へ浄化していく様を描いた作品で、自身の想像力から生まれた物語と見事なオーケストレーションが一体化された傑作です。楽劇「サロメ」はオペラ作曲家としての名声を確立した作品で、原作は新約聖書マルコ伝。官能的な表現は刺激的で、当時一大センセーションを巻き起こしたと言われています。大作曲家には珍しくリヒャルト・シュトラウスは祝典音楽を数多く作曲していますが、今日は78歳の後年期中に書かれ、自らの指揮で初演された“ウィーン市の祝典音楽”をお聴きいただきます。唯一のヴァイオリン・ソナタは24歳の頃の作品ですが、既にシュトラウスの個性が十分に発揮されており、高度な技巧を必要としながら、自由で澁澁とした色彩感を持つ秀曲です。交響詩「ツアラトウストラはかく語りき」というと、スタンリー・キューブリック監督の名作「2001年宇宙の旅」で使われた冒頭部分があまりにも有名となり、それ以外の部分はあまり知られていないようですが、ニーチェの哲学詩から得たインスピレーションを多彩なオーケストラの名技を駆使し、雄渾壮麗な流れの中に表現していて、円熟期の名曲の一つになっています。今日は若き頃の作品から、晩年の作品まで、多才なシュトラウスの魅力に迫ります。

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949):
ピアノ・ソナタ短調op.5~ 第1楽章

グレン・グールド(ピアノ)
(1982.7 ニューヨーク、RCAスタジオ)

交響詩“死と変容” op.24

カール・ベーム指揮ロンドン交響楽団
(1977.8.10 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

楽劇“サロメ” op.54

7つのヴェールの踊り／サロメの死(終幕の場)
レオニー・リサネック(ソ프라ノ)／ハンス・ホッフ(テノール)
ルドルフ・ケンペ指揮バイエルン国立歌劇場管弦楽団
(1974.7.23 バイエルン国立歌劇場でのLive)

*** 休憩 ***

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949):
ウィーン市の祝典音楽 (1943)

クリスティアン・ティーレマン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(2010.5.5 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ヴァイオリン・ソナタ変ホ長調op.18~抜粋

キヨン・ファ・チヨン(ヴァイオリン)／フィリップ・モル(ピアノ)
(1989.11.5 サントリーホールでのLive)

交響詩“ツアラトウストラはかく語りき” op.30~抜粋

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1987.4.30 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)